



## 高松市高松保育園内 地域子育て支援センター

当園の地域子育て支援センター主催の助産師さんによる孫育て講座も9月、10月、11月と計3回64人の参加で終わりました。他県での孫育てのようすや地域のとりくみについてご紹介します。

### 孫だけじゃない 地域の子どももお世話するイクジイ

定年後、地域の子育てに積極的にかかわる高齢の男性が増えている。高度経済成長を支えた世代が中心で、育児に積極的な男性イクメンにならって「イクジイ」と名付けたNPOもある。周りの助けのいない「孤育て」家庭や、仕事で忙しい現役世代を支える頼もしい存在となっている。

午後6時前、神戸市中央区の保育園にTさん(68)がお迎えにきた。園児のYちゃん(4)と笑顔でおしゃべりしながら帰宅する姿は、いかにも祖父と孫。だが、実は違う。Tさんは、神戸市のファミリー・サポート・センターに「子育てを応援したい」と登録している有償ボランティアだ。仕事で保育園や学童保育の迎えに間に合わない親に代わって子どもを迎えに行き、自宅で預かっている。

3人の孫の祖父でもあるTさんは、60歳で自動車販売会社を定年退職した後、会員登録した。2歳～小3の5人を週1回ほど預かっている。1時間700円～800円の報酬を受け取るが、「お金のためという感覚はない」という。「5年間かかわっている子もいて、孫のよう。子どもの成長を近くで見られるのがうれしい」

市区町村が運営する同様のセンターは全国に600余り。登録している男性会員は3535人(2010年度)おり、5年で2倍以上に増えた。60歳代が41%、70歳代が25%と、戦後間もないベビーブーム期に生まれた「団塊の世代」以上が目立つ。各地のセンターをとりまとめる女性労働協会(東京都港区)の担当者は「定年後、地域に関わりたいたいと思う方が増え、その手段の一つと考えているようだ」と話す。

ファミリー・サポート・センターの会員になるには事前研修が必要で、神戸市の場合は計12時間受講する。時間と熱意が必要だ。最近、研修を受けたOさん(74)は「年の割に体は丈夫だし、子どもから元気もらえる」。

孫の世代の育児を楽しみ、地域にも貢献するこうしたおじいちゃんを、NPO法人「ファザーリングジャパン」(東京都文京区)は「イクジイ」と定義。これまで育児に積極的に参加する男性「イクメン」を応援してきたが、今春、孫育て講座やジジ料理講座を開く「イクジイプロジェクト」を立ち上げた。

安藤哲也代表(48)は「イクメンは増えたが、仕事で子育てに関われないことも多い。イクジイたちに助けてもらい、イクメンの未来のモデルになってほしい」と話す。

NPO法人「エガリテ大手前」(東京都杉並区)は、沐浴の仕方や離乳食作りなどの孫育て講座を受講した男性をワイン専門家のソムリエと祖父を引っかけて「ソフリエ」と呼び、認定している。昨年2月からこれまでに約60人のソフリエが誕生。こちらも、ほとんどが60歳代だ。

団塊の世代は戦後民主主義の第1期生で考え方もリベラル。意欲はあるのに仕事に追われ、子育てに関われなかった男たちが今、人生の忘れ物を取り戻そうとしているのかも。

## イクジイを楽しむための五つの提案

### ○コミュニケーションを蜜に

…独断での孫育てはトラブルのもと。「子育ての責任者は子どもの親」との認識を持ち、どこまで手伝うか最初にきちんと話し合おう

### ○見えを張らない

…いきなり頑張り過ぎず、分からないことは素直に周囲に聞こう

### ○横のつながりを持つ

…育児には喜びも多いが、大変なこともいっぱい。おじいちゃんならではの悩みを語り合える「ジジ友」をつくろう

### ○妻に頼りすぎない

…夫婦二人で孫育てしていても、料理や洗濯など妻に負担が大きいケースも。家事も育児の一環。できることは引き受けよう

### ○少年時代の経験を生かそう

…かくれんぼや相撲など昔から定番のシンプルな遊びが、子どもは大好き。ゲームなど現代の遊びに無理に合わそうとせず、かつて楽しんだ遊びを伝えよう

## 助産師さんに聞きました

昨秋から「イマドキのいきいき孫育て講座」を開く京都府助産師会のメンバー、伊藤正子さん(64)に祖父母世代へのアドバイスを聞いた。

講座では参加者に知りたいことを上げてもらいます。いつになったら首がすわり、歩けるのかといった発達に関することや、娘や息子世代とのコミュニケーションの取り方が気になるようです。

世代間のギャップでは、今は歩行器や風呂上りのベビーパウダーは使いません。赤ちゃんが泣いていたら、「抱き癖がつく」と放っておかないで、いっぱい抱っこしてあげて。いろんな研究が進み、かつての常識が時代とともに変わってきているのです。

娘の世代は、価値観を押しつけられるのを嫌がる。祖父母も自分が子育てをしていたときに助けてもらってうれしかったことを思い出して、何を手伝ってほしいのか、上手に尋ねてみて。最終的には孫の母親・父親の考えを尊重してほしい。

少子化や団塊の世代の高齢化で、一人の子を何人かの大人で育てるイメージ。母親も専業主婦ではなく働いている人が多い。おじいちゃん、おばあちゃんは自信を持って孫育てをして。一番身近なサポーターですから。

## 孫育て 経験とゆとり 自信を持って

京都市北区のKさん(61)は今年に入って近くのスポーツジムに通い出した。以前から水泳を続けてきたが、「孫育ては体力」と実感し、真剣に体力づくりの必要性を感じるからだ。

娘の仕事の関係で香港に住む孫のS君は4歳になった。たまに帰省した際には、家の中や公園で走り回るので、安全に何より気をつかう。抱っこしてやるにも体重が重くなった。孫だけを預かることも多く、鴨川べりで遊んでいて、自分が水に落ちてしまったこともある。

普段は夫と2人暮らし。孫が遊びに来るとき「もうじき着く」とメールを受ければ、そわそわする。しばらく滞在して行った後は、ぐったり疲れが出るのも事実だが、「生活にメリハリがついていい」と思う。

夫のMさん(76)はもっぱら手作りおもちゃを用意して待つ。牛乳パックやボール紙を使ってバスや飛行機、ヨットの模型を作る。空き缶の缶ぽっくりも好評だった。

「市販のおもちゃを買い与えるより、手作りの方が孫が興味を持つ。自分でも作りたがって、はさみの使い方も覚える」

2人は「父親、母親は仕事や家事に追われる。時間に余裕のある、おじい、おばあの役目がある」と話す。

(「保育と幼児教育版」ニホンミック 2011年11月より)

### 孫育てに関する著書やおすすめ絵本

- ・「じいじ、ばあばのための孫育ての教科書」 井上 淳子著(臨床心理士)PHP 研究所 1,260円
- ・「子育て知らずの孫育て」 田原 総一朗著(ジャーナリスト)東京新聞 絵本
- ・「トム」 光村教育図書 (おちゃめな祖父と孫の関わりを描いたもの)
- ・「なぜあんなさうの？」 BL出版 (カエルとネズミの争いがエスカレートしていく様子を 絵だけ描いたもの)